

Monthly

REPORT

6

May 2026

Yamagata West Rotary Club 2025-2026
国際ロータリー第2800地区 山形西ロータリークラブ



よいことの
ために
手を取りあおう



ロータリー月間テーマ
ロータリー親睦活動月間

第3088回通常例会

「大人のお洒落について」

第3089回通常例会

「サイエンス リーダーシップについて」

第3090回例会

「ロータリーディ」

第3091回通常例会

「山形大学のナスカ地上絵研究について」

第3092回例会

「最終例会・球風会」

2025-2026年度 : 会長_五十嵐信 / 幹事_武田秀和
会報委員会 : 委員長_佐藤淳 / 副委員長_芦野茂 / 高橋順弘 / 小野裕史 / 長澤純

6月を振り返って



五十嵐信会長

今年度のマンスリーレポートも、今月号で最後となりました。

名残惜しい気持ちがないと言えば嘘になります。しかし、その気持ちは一ミリほどでしょうか。この一年、私なりに全力で走り切ることができました。今は少しだけ肩の荷を下ろし、静かに休みたいというのが率直な心境です。

今月の例会も実に充実した内容となりました。

浦山会員による会員卓話に始まり、コーチング業界の第一人者である伊藤守様、そしてナスカ地上絵研究の世界的権威であり羽陽学園短期大学学長の渡邊洋一先生にご登壇いただきました。最終例会はパレスグランデールにおいて、多くの会員の笑顔に囲まれながら盛大に締めくくることができました。

最後の最後まで力を振り絞り、一年間の締めくくりにふさわしい時間であったと思っています。

、その最終例会の前には、友好クラブである高知南ロータリークラブの最終例会にも出席し、山形西ロータリークラブ創立70周年記念式典へのご参加をお願いしてまいりました。

山形の誇るさくらんぼ、山形的美酒「秀鳳」の最高峰「オーサム」をお土産に持参したところ、大変温かく迎えていただき、帰りには持ち切れないほどのお土産を頂戴しました。

しかし、私が持ち帰ったのは、形ある土産ではありません。

高知南ロータリークラブが四国四県を挙げて毎年継続している高校生アメリカ短期ホームステイ事業。その構想、その歴史、そして実際に汗を流してこられた会員の皆様のお話を伺った時、私は正直、身体が震えました。

継続するということは、これほどまでにクラブの文化になるのか。

奉仕とは、これほどまでに地域に根を張るものなのか。

改めて教えられた思いでした。

さらに驚いたのは、そのクラブの活力です。

会員約80余名。四国でも最も元気があると言われるクラブですが、「ニコニコ」の年間目標額は300万円。今年は最終例会で320万円を達成し、会場は大歓声に包まれていました。

その資金を原資として地域へ奉仕し、自分たちも心から楽しむ。

奉仕と親睦が自然に循環している姿が、そこにはありました。

私は改めて思いました。

友情は目的ではありません。

友情と誇りは、より大きな奉仕を生み出すための力です。

親睦のための親睦ではなく、友情が地域を変え、世界を変える原動力になる。

それこそが国際ロータリーの理念であり、高知南ロータリークラブは、それを見事に体現していました。

このような素晴らしいクラブと長年友好関係を築いてこられた先輩方に、心から感謝申し上げます。

さて、来年度、国際ロータリーは新たなメッセージとして「持続可能なインパクト」を掲げます。

これは決して新しい流行語ではありません。

今年度の「よいことのために手を取りあおう」という理念をさらに発展させ、奉仕活動だけではなく、会員増強、クラブ運営、人材育成、財政、広報、そのすべてにおいて成果を測定し、長期的な視点で強いクラブをつくっていかうという明確な意思表示です。

言い換えれば、「頑張りました」ではなく、「何を残したのか」が問われる時代に入ったということです。

私は会長に就任する前、日本各地のガバナー経験者であり、古くから親しくさせていただいている友人たちから、ロータリーブランドについて多くの話を聞きました。

その中で最も印象に残った言葉があります。

「親睦団体であることを前面に出すのは、もうやめなさい。」

最初は少し驚きました。

私自身、ロータリーとは、職業奉仕や寄付活動を通じて社会に貢献すると同時に、誇りある仲間たちが集う世界最高の親睦団体でもあったと思っていたからです。

しかし、国際ロータリーは十年以上も前から、もっと大きな方向へ舵を切っていました。

地域の人々から、「あのクラブは、いつも地域のために行動している。」

そう認識されること。

会員一人ひとりではなく、「クラブ」という組織そのものがブランドになること。

それこそがロータリーを未来へ残す道であり、会員増強にも、社会的信用にも、すべてにつながっていく。

その考え方でした。

私は、この一年、その方向へ少しでも舵を切ろうと努力してきたつもりです。

ロータリーデーへの挑戦。樹氷再生プロジェクト。

テレビ番組や新聞を通じた広報。

地域との連携。

奉仕活動を「点」で終わらせず、「面」として広げていく試み。

その一つひとつが、クラブの未来への布石であったと信じています。

もちろん、一年で文化は変わりません。

理念は、一年で定着するものでもありません。

だからこそ、大切なのは続けることです。

継続して初めて文化になります。

文化になって初めてブランドになります。

ブランドになって初めて、持続可能なインパクトが生まれます。

どうか、この流れだけは止めないでいただきたい。

クラブの進化を止めないでいただきたい。

70周年という節目を迎える今だからこそ、山形西ロータリークラブは「昔に戻る」のではなく、「未来へ進む」クラブであってほしいと願っています。

一年間、会員の皆様には本当に支えていただきました。

失敗もあったでしょう。至らぬ点も多々あったと思います。

それでも最後まで会長として務めることができたのは、会員の皆様のお力添えがあったからにほかなりません。

心より感謝申し上げます。

山形西ロータリークラブが、十年後も二十年後も、地域から必要とされ、世界とつながる誇りあるクラブであり続けることを、心から祈念し、私の最後のマンスリーレポートのご挨拶といたします。

一年間、本当にありがとうございました。

- ・ 第3088回例会 会長挨拶
- ・ 第3089回例会 会長挨拶

- ・ 第3091回例会 会長挨拶
- ・ 第3092回例会 会長挨拶

■ 幹事報告



武田秀和幹事

6月のロータリーレート：159円

- ・ 鈴木浩司会員が6月21日ご逝去
- ・ 市村清勝会員へ第3回マルチプル米山功労者の表彰
- ・ 遠藤栄次郎会員、長谷川浩二会員が6月末で退会
- ・ 高嶋俊幸会員、長谷川浩一郎会員のポールハリスフェローが届きました。



委員会報告

広報・雑誌委員会 橋本委員長



先月に引き続き、「ロータリーの友」に戸田正宏会員の俳句作品が掲載されたことについての紹介。
選者の夏井いつき氏の選評も紹介された。

米山奨学委員会 大場委員長



年度末へ向けての米山奨学金、ロータリー財団寄付の呼びかけを行った。

社会奉仕委員会 横沢委員長



6月30日に種まき参加の事前準備作業を実施。メンバーおよび村山産業高校の生徒さん10名を含め35名で作業を行った。

6月13日の播種作業ロータリーディへの参加を呼びかけ

会員卓話



「大人のお洒落について」 浦山潔 会員

今日の会員卓話は、TAILOR URAYAMA&BELLO顧問・浦山会員より「大人のお洒落について」というテーマで行われた。浦山会員よりロータリアンとしての社会的立場のある大人が身につけるべき服装の基本と、実践的な着こなしのポイントを丁寧に解説していただいた。

まず「おしゃれとは決して目立つことではなく、自然であること」と強調。おしゃれな人の服装は細部を見ても特別な装飾があるわけではなく、全体として調和が取れている点が特徴だと述べた。続いて、スーツを着るうえで最も重要なのは「型」であり、肩のフィット感、上着の丈、袖の長さなど、基本的な寸法が正しく整っていることが第一だと説明した。

実際にモデルとして武田元裕会員を壇上に招き、具体的なポイントを示しながら解説を進めた。袖丈は「シャツが1センチほど見えるのが基本」であり、肩のラインが高い位置にあると自然で美しいシルエットになること、ラベル幅は「自分の肩幅の中心からのバランスで決まる」など、プロの視点から細部の基準を紹介した。また、顔が大きく見えるため「細すぎるラベルは避けるべき」といった実践的な助言もあった。

パンツについては、折り目（クリース）が親指と人差し指の間に落ちる位置が最も美しく、足が長く見えると説明。さらに、体型によってはパンツ内部に特別な袋を付けてラインを整えることもあるなど、仕立ての世界ならではの工夫も紹介した。

続いて、シャツは「下着である」という原則を強調。会場やフォーマルな場では必ずドレスシャツを着用すべきであり、胸ポケットのあるシャツは本来正式ではないと述べた。ネクタイについては長さが非常に重要で、日本人の標準は144～145cmであること、長すぎるネクタイは「トラップ氏のように金隠しになる」とユーモアを交えて注意を促した。

靴については「最低限、必ず磨くこと」と強調。山形は湿気が多いため、素材選びにも注意が必要で、エルメスの靴は高価だが湿気に弱く山形向きではないと具体例を挙げた。また、コートはカシミアのチェスターコートを一着持つと大人の装いが格段に整うと述べ、三国連太郎氏がキャメルのカシミアコートにジーンズを合わせて散歩する姿を例に「年齢を重ねたおしゃれの楽しさ」を語った。

最後に、服装は単なる外見ではなく「その人の人生や生き方そのもの」であり、ワードローブを整え、自分だけの基準を持つことが大切だと締めくくった。ロータリアンとしての社会的立場を持つ者が、相手への敬意を服装で示すことの重要性を改めて示す卓話となった。



講師卓話



「サイエンス・オブ・リーダーシップ」 伊藤守氏（株式会社コーチ・エィ 取締役 ファウンダー）

私講演者の伊藤氏は、1997年にエグゼクティブコーチング会社「コーチエィ」を設立し、CEOや次世代リーダー育成を中心に活動してきた。グローバル化に伴いニューヨーク・香港・タイにも拠点を広げ、現在は日本語・英語・中国語・タイ語でサービスを提供している。講演のテーマ「サイエンス・オブ・リーダーシップ」では、従来型のトップダウン型リーダー像が限界を迎えていると指摘し、「リーダーがすべての情報を掌握することはできない」「すべての人にリーダーシップを持たせる必要がある」と述べる（文書より引用：「リーダーがどれだけ優れていても、すべての情報を掌握することはできない」）。

リーダーシップは個人の資質ではなく「組織のコンピテンシー」であり、社員全員が主体的に判断し行動できる状態をつくることが重要だと強調する。ハーバードの研究では、膨大なリーダーシップ文献をAIで分析し、自己認識・誠実性・アジャイル性・関係性・共感性など9つの要素が共通して重要であると示された。

また、CEOの負荷は増大しており、情報量は「17世紀の経営者の一生分が、現代では日経新聞1日分に相当する」とされる。新任CEOの多くが18ヶ月以内に失敗する理由は「部下や同僚との関係構築の失敗」であり、リーダーは周囲に大きな影響を与える存在である。

元ロッテ監督・吉井氏の例では、選手が話しかけやすい環境づくりを徹底し、失敗時には「言語化させる」ことで思考を促した（引用：「どのようにこの事態が生じたのかについてちゃんと言語化させる」）。言語化は思考の前提であり、双方向の対話が学習と成長を生むと説明する。

さらに、視点を変えることの重要性を地図の例で示し、固定概念からの脱却がリーダーシップ開発の核心であると述べる。研修は「型にはめる」ため限界があり、リーダーシップは“開発”されるべきものだとして強調。真のリーダーはフォロワーを増やすのではなく「次のリーダーを育てる」ことに注力すべきだと結んだ。



講師卓話



「山形大学のナスカ地上絵研究について」 渡邊洋一氏（学校法人羽陽学園短期大学 学長）

渡邊学長は、山形大学が2004年から本格的に取り組んできたナスカ地上絵研究の経緯と、最新の成果、そして保護活動の現状について、多角的に紹介した。まず、ナスカ研究の背景として、アンデス文明が旧世界の文明（メソポタミア・エジプト・中国など）と全く接触せずに独自発展した点を強調し、「人類が文明をどのように形成したかを知る上で極めて重要な地域」であると説明した。

人類がアフリカから拡散し、氷河期にベーリング海峡を渡ってアメリカ大陸へ移住した歴史を概説し、アンデス地域の動物相（リャマはラクダ科、馬は存在しない）や、スペイン人到来時の文明衝突の様子を紹介。こうした基礎知識が、地上絵の文化的背景を理解する上で不可欠であると述べた。

続いて、ナスカ台地の地形と地上絵の構造を説明。地上絵は「日に焼けた黒い石を除去し、下の明るい砂地を露出させることで描かれている」。有名なハチドリやサルなどの大型地上絵は100m級で約30点しかなく、実際には「線や幾何学図形が圧倒的多数」を占める。また、近年注目される小型地上絵は10m未満のものが多く、従来は「地味で見栄えがしないため研究が進まなかった」と指摘した。

山形大学がナスカ研究を担う理由として、東大の文化人類学・考古学研究室との学術的系譜、ペルーの山形県人会の協力、そして山形大学が現地に研究所を建設し、土器の記録・修復を行える体制を整えた点を挙げた。研究所の維持費は年間200～300万円に及ぶが、大学は基礎研究を重視し、予算削減の中でも継続を支援しているという。

研究の大きな転換点となったのがAIの導入である。従来はセスナ機からの撮影と徒歩での確認を繰り返し、15年で約300点の小型地上絵を発見した。しかし、衛星写真をAIに学習させ「人工的な痕跡をすべて抽出」させる手法により、AIは半年で同数の候補を提示。現地調査を経て多数の新地上絵が確認された。卓話では、AIが発見した「5mほどの人型地上絵」や「動物を模した小型地上絵」の例が紹介され、会場から驚きの声が上がった。

さらに、地上絵の保護活動の難しさにも言及。ナスカ市は観光資源として地上絵の保全を進めているが、近年のペルー経済成長に伴い、地上絵のある山の裏側が「銅採掘のために掘り返されていた」ことが判明。生活がかかる採掘を止めることは困難であり、文化庁と協力し「地上絵の存在を視覚的に示し、破壊を防ぐ」ための修復作業を開始した。



修復は、東北芸工大から筑波大に移った文化遺産修復の専門家・松井教授とペルー側研究者が協働し、自然な景観を損なわず、かつ耐久性のある方法を模索しながら進めている。クラウドファンディングにより300万円以上の支援が集まり、80点ある地上絵のうち13点の修復が完了した。しかし、気候条件や材料の検証が必要で、一度に大量修復はできない。円安の影響で費用が増大しており、JICAなど外部機関との連携を進めているという。

最後に渡辺学長は、「研究費は保護には使えない。研究と保護は別の予算体系であり、継続には皆様の理解と支援が不可欠」と述べ、ホームページで公開している研究成果や修復状況を紹介し、関心を持っていただければ幸いと締めくくった。

ロータリディ

6月13日に蔵王にて変更例会としてロータリディ「オオシラビソ種蒔き例会」が開催された。五十嵐会長よりロータリーディの趣旨として「クラブの活動を地域に知ってもらうこと」、そして今年で3回目となる「蔵王の森の再生プロジェクト」への継続的な取り組みについて説明があった。樹氷再生には長期的な活動が必要であり、「100回目でようやく形になるかもしれない」との言葉が印象的であった。参加者への感謝と、最後まで安全に活動できるよう祈念して挨拶を締めた。

今回の参加者はクラブ外より、

- ・ 山形森林管理署：山口所長、柳谷様
- ・ 山形県みどり自然課：伊藤様、花井様
- ・ 上山アルペンスキークラブ：富山コーチ、生徒・ご家族
- ・ 日本公園施設業協会の仲間：宮城県萩原市 佐藤様、秋田市 丸山様
- ・ 村山産業高校：松沢先生、生徒の皆さん

の参加をいただき、総勢80人ほどの参加となった。この活動の様子はYTS、さくらんぼテレビ、山形新聞等で紹介された。

作業内容としては、囲いのなかにオオシラビソの種を等間隔に植えるということを行った。昨年に種を植えたところの発芽状況も確認しながら最適なやり方を探りながら播種作業を行った。



最終例会

2026年6月29日、パレスグランデールにて本年度最後の例会として多くの会員が参加した。最後の会長挨拶で五十嵐会長は一年間の活動を振り返り、深い感謝の言葉を述べた。閉会点鐘の後是一年間の締めくくりの懇親会が行われた。懇親会では、その日の午前中に行われた球風会の表彰や会長幹事への花束贈呈が行われ、2025-2026年度が無事に終了した。



退会会員紹介

遠藤栄次郎会員



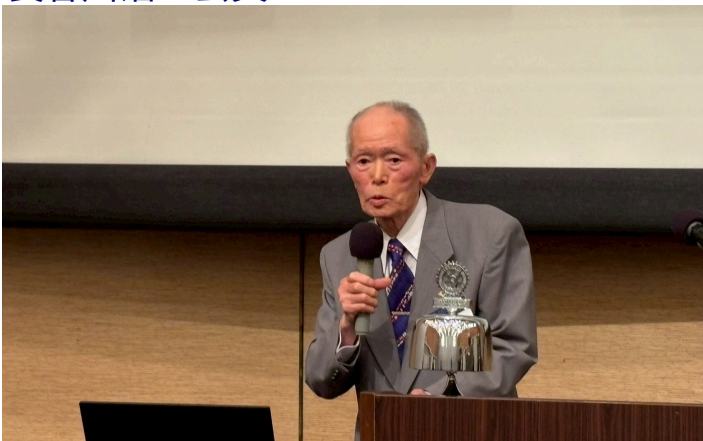
会社名 遠藤商事株式会社

役職 名誉会長

遠藤栄次郎会員は、昭和35年の入会以来66年にわたり山形西ロータリークラブを支えてられました。ご挨拶では、体調は元気であるものの、近年は聴力の低下が進み、補聴器や各種機器を用いても例会での会話が十分に聞き取れず、皆様にご迷惑をおかけする場面が増えてきたことを率直に述べられました。そのため、熟慮の末に退会を決断されたとのことでした。

長年のクラブ活動を振り返り、「皆様から多くのことを教えていただき、また楽しませていただきました」と深い感謝の気持ちを表されました。ロータリーで得た友情や学びは人生の大きな財産であり、仲間と共に奉仕活動に励んできた日々はかけがえのない時間であったと語られました。また、クラブが今後も楽しく知識を得られる場として発展していくことを願い、会員の皆様が健康で充実した毎日を過ごされるよう祈念されました。最後に、本日の例会に出席し、皆様のお顔を拝見できたことへの喜びを述べられ、温かい言葉で挨拶を締めくくられました。

長谷川浩二会員



会社名 株式会社社長栄堂

役職 取締役会長

長谷川浩司会員は、昭和52年の入会以来、約半世紀にわたりクラブの発展に尽力されてきました。ご挨拶では、長年の活動を振り返り、ライオンズクラブとの交流や奉仕活動、クラブ運営など多岐にわたる役割を担い、多くの先輩方からご指導を受けながら充実したロータリー人生を歩んできたことを述べられました。

「たくさんの技を教えていただきました」と語られ、クラブで学んだ経験が自身の人生を豊かにし、成長の糧となったことへの深い感謝を表されました。また、クラブの伝統を守りながら活動してきたことに誇りを感じておられ、「本クラブの初々しい精神を胸に、長年活動してこられた」と述べられました。

退会にあたり、「私は微力ではありましたが、皆様のおかげでここまで続けることができました」と謙虚に述べられ、会員の皆様への敬意と感謝を改めて表されました。これまでの友情と支援に深く御礼を申し上げ、温かい言葉で挨拶を締めくくられました。

退会会員紹介

鈴木浩司会員



会社名 株式会社鈴木油店

役職 相談役

鈴木浩司会員が6月21日にご逝去されました。

鈴木浩司会員は平成10年12月7日に入会され、2013～2014年度には吉田福平会長のもと幹事を担当され、2019～2020年度には当クラブの会長を務めました。

これまでの鈴木浩司会員のクラブへの貢献と会員との友情に感謝いたします。

中山眞一会員

会社名 (株)塚田会計事務所

役職 取締役会長

中山眞一会員より6月末にて退会したいというご連絡をいただきました。

これまでの中山眞一会員のクラブへの貢献と会員との友情に感謝いたします。

クラブ会報アーカイブは
こちらのQRコードからご覧ください



山形西ロータリークラブ事務局

山形市十日町1丁目1-26 歌懸稲荷神社2F

info-ywest@ywrc.jp